

行き行きて、駿河の国に至りぬ。宇津の山に至りて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、薦・楓は茂り、もの心細く、すずろなるめを見る、ことと思ふに、修行者会ひたり。「かかる道は、いかでかいまする。」と言ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにて、文書きてつく。

駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ
その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ね上げたらむほどして、
なりは塩尻のやうになむありける。

なほ行き行きて、武藏の国と下つ総の国との中に、いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりに群れて、思ひやれば、限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、渡し守、「はや舟に乗れ。日も暮れぬ。」と言ふに、乗りて渡らむとするに、みな人のわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鴎の大きさなる、水の上に遊びつつ、魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、

名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと
とよめりければ、舟ござりて泣きにけり。

○用言を指摘し、右側に終止形を記す。 ○助動詞を指摘し、右側に意味を記す。